東北大学教育学部研究年報　第38集（1990年）

ペスタロッチーにおける道徳教育の原理
—ノイホーフ貧民学校の実践を中心に—

鈴　木　由美子

1. はじめに
2. 重農主義的見解から見たノイホーフの貧民学校の経営理念
3. ノイホーフ貧民学校における道徳教育の課題
(1) 「労働力」としての人間と「労働者」としての人間
(2) 生産労働と「宗教的なもの」との結合

1. はじめに

スイスの近代はアンシャン・レジームの解体から始まった。それは第一に貴族制の廃止を，第二に封建的税制の撤廃を意味した。こうした政治的経済的な二面からの要求は，また新しい人間を必要とした。人間の出生，結婚，死亡などを管理してきた教会勢力から人間教育に関する権力をうばいとること，つまり教育の世俗化が近代のひとつの課題だったのである。スイスの近代化は，ヘルヴェーチア政府の樹立（1798年）に象徴される。ヘルヴェーチア政府は，国民教育を重要な政策課題のひとつとし，ペスタロッチー（J. H. Pestalozzi, 1746−1827）は，この課題のために文部大臣シュタップファーによって登用された。[1] スイスの政治的経済的近代化にふさわしい人間の形成を教育法則として提示するために，ペスタロッチーはまずシュタンスにおいて教育実践に着手する。

ところで，ペスタロッチーが教育実践に着手するのは，シュタンスが初めてではない。かれはノイホーフで農場を経営していた1774年ごろから，貧民や浮浪児を収容して，一種の貧民学校を開校している。この貧民学校についてペスタロッチーは，ザラジンにあてた書簡のなかで次のように述べている。「わたしは自分の経済上の目的とならんで，道徳教育を他のいっさいの目標のための基礎にしようと努めている」[2]と。実際，ノイホーフの貧民学校における実践には，マニュファクチャーから機械制大工業への経済的変動のなかで，教育の法則化への関心と政治的経済的要請とのかさなりあいのなかから，労働と教育とを結合する，教育史上重要な観点が含まれている。[3] ペスタロッチーは農村への家内労働の流入が，子どもの発達を疎外し，子どもの精神や肉体を破滅に導いている現実をまのあたりにしながら，家内工業のもつ人間形成的側面にも注目する。ペスタロッチーは生産労働と道徳教育とを相互補完的な関係におき，生産労働によって道徳教育が行われうること，また逆にそうした道徳教育によってこそ生産労働が支えられることを実証しようとした。それゆえノイホーフの貧民学校での実践は，一方では資本主義的経済循環における労働学校の有効性に対する問いであり，他方で道徳教育の法則化のための最初の実践であるといえよう。

こうした重要な意義をもつにもかかわらず，ペスタロッチーの道徳教育に関する研究において，ノイホーフの貧民学校における実践はこれまでほとんど取り上げられなかった。[4] こうしたなかで

ペスタロッチーの人間学を政治学との関連において把握する，批判的立場にたつラングは，ノイホーフの貧民学校での試みをとりあげながら，それを政治的な野心のなかに含めている。[5] 筆者は，ラングの社会科学的な指向に基本的には同意しながらも，スイスにおけるもう一方の社会的変動である経済的な側面が等閑に付されてきたことに疑問を感じる。ペスタロッチーはつねに時代のなかで，時代の課題に対して闘った思想家であると同時に実践家であった。それゆえ経済的な問題もまたペスタロッチーにとって重要な課題であると思われる。実際，ペスタロッチーは初期から，封建制のもつ害悪を，政治的側面ならびに経済的側面の両面から意識しており，それは晩年の『ランゲンタール講演』にまで続くペスタロッチーの重要な課題意識のひとつなのである。

ここでノイホーフの貧民学校における道徳教育の実践に注目してみると，そこには宗教心を重視しながらも，同時に信仰問答書に代表される旧来の宗教教育を批判する観点が見られる。18世紀における啓蒙主義は，国家と教会との関係に徹底的な変革を生じさせ，啓蒙や教育を国家の監督下におくよう作用した。教会と学校とを分離することが，ひとつの合言葉だったのである。[6] 理知的傾向をもつ「啓蒙主義は宗教という二元論的・超自然主義現象に対する最初の包括的，原理的な反抗である」。[7] ペスタロッチーは，基本的には，啓蒙主義の流れをくみながらも，独自の見解を示す。ペスタロッチーは，啓蒙それ自体のもつ人間解放的意味を認めながらも，それを無条件に肯定しない。ペスタロッチーは，ルターの民衆の啓蒙とフランスからでてきた民衆の啓蒙との違いを指摘し，宗教的なものを否定するフランス啓蒙主義を批判する。ペスタロッチーのみるところ宗教改革による民衆の啓蒙は，国民の良識や家庭の祝福に明瞭に役立ったのに対し，フランスに由来する現代の啓蒙は，国民の良風や家庭の幸福を明瞭に妨げている。ふたつの時代のもっとも大きな相違は，宗教的なものを肯定するかどうかにある。[8] ペスタロッチーは，ルターの時代の啓蒙を評価することによって，民衆の啓蒙を宗教的なものと結合する視点を示す。それゆえペスタロッチーの課題は，宗教的なもの，つまり感情や愛などを温存しながら，しかもそれを公教育における道徳教育として法則化することにあったといえよう。

教会勢力の一掃を意図した市民社会形成期に生きた教育者ペスタロッチーが，ふたたび非合理的なものを肯定しているのは大変興味深いことである。ペスタロッチーの宗教観に関してペスタロッチー研究者であるシュプランガーは，『隠者の夕暮』におけるキリスト教国家の肯定と，『探究』におけるキリスト教国家への批判との比較から，キリスト教国家に対する訣別をフランス革命前後においている。[9] この見解は，啓蒙主義と市民革命との関係からみると，まったく妥当である。しかしペスタロッチーのことばにも見られるように，キリスト教国家への批判はけっしてそれまでのキリスト教観との訣別の表明ではなく，むしろ延長なのである。[10] それゆえ逆に，『隠者の夕暮』における神や宗教的なものに対する肯定的見解の政治的社会的意味が問われねばならないといえよう。つまりペスタロッチーは，統治形態としてのキリスト教国家を原則的に否定しながら，同時に宗教的なものがもつ人間形成的側面を肯定していたと考えられるのである。そこで本稿の目的は，『隠者の夕暮』が執筆された1780年代のペスタロッチーの宗教観の政治的社会的意味を，ノイホ

ーフの貧民学校の実践を通じて明らかにすることによって，ペスタロッチーのいう宗教的なものの中身を探ることにある。これは，資本主義的経済体制の確立期における道徳教育の法則化のみちすじをたどるためのひとつの試論でもある。

2. 重農主義的見解からみたノイホーフの貧民学校の経営現念

ペスタロッチーが青年時代の法律家志望から突然農業家へ転身したのは，1769年，23歳のときである。この転身は，法律家への道への絶望と，農業への関心が高かった時代傾向によるものとして理解されてきた。[11] しかし詳細に検討すると，ノイホーフでの農業実践は，転身ではなく，むしろペスタロッチーのいう「祖国愛」の経済的な面での実践といえる。まず理論的な面からいうと，ペスタロッチーが農業をはじめる前に師事したチッフェリは，有名な重農主義者であり，ペスタロッチー自身もまた重農主義に深い感心を示していた。[12] 重農主義は農業生産を中心にした経済の循環過程に関する理論であり，18世紀当時においてはもっとも進んだ科学的分野のひとつであった。重農主義は，まず唯一の生産者である農民を経済過程の中心におき，経済過程を単純再生産過程と位置づける。そのため，農業生産の効率化が課題であり，ペスタロッチー自身も商品作物の栽培，家畜飼料の栽培，農機具の改良など農業経営の合理化のための研究を行っていた。[13] こうした理論的裏付けのもとに農業経営をはじめたペスタロッチーは，一方で生産性の向上による農民の生活向上を，他方で商品作物の栽培による封建的税の免除措置の享受を意図していた。こうした観点は，都市住民と農村住民との不平等の解消をはかった愛国者団以来のペスタロッチーの意志の実践的貫徹であるといえよう。しかし，経済的な実践のみ行ったことに満足できなかったペスタロッチーはノイホーフでの農場経営に破綻をきたした1774年以降，貧民の子どもを収容して，学校経営を始める。[14] このノイホーフ貧民学校は，子どもの工場労働によって得られた収入による学校経営を意図したものであり，貧民の収容が慈善であった当時においては希有なものであった。

ペスタロッチーによれば、「もっとも重要な貧民施設は，孤児を教育する施設である。大部分の貧民は，自分に必要な物を得るための教育をうけていないために，貧民にとどまっている。この原因をとりのぞかねばならない」。[15] こうした課題意識を形成した第一の要因は，スイスにおける児童労働の実態であった。18世紀後半のスイスは，家内工業の最盛期であり，子どもは幼いときから経済循環のなかに組み込まれ，そのため充分な教育も受けられず，体を壊し，享楽に走り，心身ともに磨滅させられていた。[16] こうした現状のなかから子どもたちを収容し，世話を施す慈善院がうまれていった。貧民教育への関心は，もはや少数のヒューマニストたちの関心事であるだけでなく，時代的課題であったのである。[17] ペスタロッチーは，しかし，こうした公共の慈善施設を徹底的に批判する。「一般に貧困という災いのために人びとが講じた恩恵手段や慈悲手段は，この災いをかえって刺激助長するものであり，けっして貧困を除去するものではないと思われたからである」。[18] ペスタロッチーによれば，公共の慈善施設における「安らぎや享楽や幸福は，活動的な状態をもたらさない。豊かさは探究心をもたらさない。当然もつべき感謝の心についての教えも，それだけで

は労働意欲をおこさせない。善行への感傷的な希望を強めることもない」。[19]　それどころか，善意にみちた施設から現実社会に投げ出された時，自活手段をもたない貧民たちは，より悪い状態へと追いやられるのである。こうした公共の慈善施設に対し，ペストロッチーは次のような観点を提示する。まず第一に，子どもはかなり年少のうちから，労働によって自分の生計がたてられること，さらに朝早くから夜遅くまでの労働も，環境が整っていれば，けっして子どもの成長や発育を妨げないこと。第二に，教育という目標と生業とは子どもが年少のときから兼ね合わせられること，である。[20]　こうしてペスタロッチーは，労働と教育との結合を，貧民教育の原理として抽出する。これがノイホーフ貧民学校の教育原理である。

ペスタロッチーによれば，この学校の目的は次の点にあった。第一に，「貧民を，貧困によって（zur Armuth）教育すること」[21]であり，第二に，そのために必要な労働学校が，経済循環のなかで充分に利益をあげうることを実践的に証明し，それによって労働学校を拡大していくことであった。

3. ノイホーフ貧民学校における道徳教育の課題

(1) 「労働力」としての人間と「労働者」としての人間

労働学校が資本主義的経済循環のなかで収益をあげうることの証明は，結論からいえば、失敗に終わった。その原因として，ペスタロッチーの経営上の無能さ，ヨーロッパをおそった冷害と飢饉などがあげられるが，そうした外的条件よりも，むしろ労働学校が，資本主義的経済循環のなかに組み込まれうるのかどうかということを問題にしたい。この点に関しペスタロッチーは，工業労働と商業とを結合した点に事業の失敗の原因をみている。[22]　しかしクループスカヤがいうように，経済循環から切り離された「小さな生産学校コロニー」の存在は，ユートピアにすぎない。[23]　それゆえペスタロッチーの自己批判的な見解に満足することなく，この事業の経済的効果について検討することは意味あることである。

ペスタロッチーはもともと単に教育者としてノイホーフ貧民学校の経営に携わったわけではない。そこには重農主義者としてのペスタロッチーの見解が明らかに含まれていた。バダンテールがいうように，18世紀当時にあっては，人口は国力を意味していた。[24]　『立法と嬰児殺し』のなかにも，こうした観点が含まれている。ペスタロッチーはこの著作のなかで，当時社会問題となっていた嬰児殺しに言及し，未婚の歳若い母親が生まれてまもないわが子を殺すのは，相手の男性や家族や社会に絶望したからであり，そうした絶望の源泉を塞ぐことが真の立法措置であるとする。さらにペスタロッチーはそうして生まれてきた私生児の育成のために育児院や孤児院を作るのは，人口増加の観点から見るとむしろマイナスであることを指摘し，自然衝動の満足と両親の法的義務との一致を説く。つまり，育児院や孤児院における養育状況では，子どもの生存が極めて困難であることから両親による養育による生存率の向上の視点を提供しているといえよう。それはまた，マニュファクチャー段階においては，労働力，ひいては国力の増大を意味するのである。それゆえ貧民の子ど

もに労働技術を与えることは，子どもを貧民である状況から救い出すとともに，資本主義的競争力を工場にもたらすことでもある。[25]

こうした観点は，ノイホーフ貧民学校について，ベルンの地方貴族であるニクラウス・エマニュエル・v. チャルナーにあてた書簡のなかにもみられる。この書簡のなかでペスタロッチーは，工場に何人かの青少年を収容し，そこで労働教育を受けさせながらしかも工場の生産労働に従事させることによって，工場に収益をもたらすような試みについて述べる。彼によれば，「工場経営者は，容易にまた綿密に工場を経営できる。すべての商品を工場外で売らねばならないときには，労働時間の配分，平等，迅速性，見積もりを決定できる。… さらに，好況時にはあらゆる工場経営者がさらされる労働者の暴動（Unruhe），煽動（Aufwicklung），謀叛（Konspiration）の危険に対し，工場に子どもをとどめることによる安全性がもつ優位さを，そのような施設の後のちの利益に確実に拡大することは，多方面にわたって重要なことである」。[26] つまりペスタロッチーは，工場に労働学校を付設することの利点として，管理の徹底による労働効率の向上，労働者の規律の確保（労働争議の予防）ならびに労働者の不断の確保といった点をあげているのである。チャルナーにあてた書簡には，こうした観点からの労働学校の経営とその収益についての綿密な計算が記されている。[27] そこには貧民を救済し自活させるという目的だけでなく，また成長しつつある人間の収入能力のなかには，真の資源（Quelle）と財源（Ressource）がある[28] という人間観が含まれている。もちろん貧民は，富んだ人々の生活をうるおすための道具であってはならない。しかしながらまた，貧民自身がもつ経済的な力，すなわち労働力も無視することはできない。それゆえ貧民に自活のための力を与えることは，子どもの内的な諸力を発達させ，自己の要求を充分に満足させる[29] だけでなく，また資本主義的経済循環のなかで競争に打ち勝てる経済力を工場にもたらすことでもある。こうした経営的観点は重要である。ペスタロッチーは『スイス週報』のなかでも，西インドの奴隷の例をあげ，西インドの農園の所有者が自己の利益をより計算できるようになればなるほど奴隷の状態は改善されるという。[30] 逆にいえば，奴隷の状態を改善することは，同時に農園所有者の収益の増加を意味するというのである。ここには，明らかに資本家としての側面がみられる。ペスタロッチーがノイホーフに貧民を収容して労働者教育を施したのは，貧民を貧民のままとどめることに対する人道的な批判のみならず，そうした労働者教育によって育成された貧民が，確実に資本主義的経済循環のなかで労働力を国家に対して提供しうること，そしてそれによって国家財政の安定に貢献しうるとの経済的見通しをもっていたためであるといえよう。

ところでペスタロッチーが貧民教育施設の失敗の原因として，工場労働と商業との結合をあげていたことは前述したとおりであるが，さらに根本的な問題は，工場に収益をもたらしうるまでに子どもが成長する前に，子どもたちが親のもとにひきとられてしまう点にあった。子どもの教育は，工場にとってみれば資本投資でもあったから，資本投資した子どもがそれ以上の収益をあげうる労働者に成長する前に工場を去ることは，工場にとって大損失だったのである。それゆえペスタロッチーの貧民教育施設における工場労働と商業との結合をユートピアとして批判するよりもむしろ，

もっと実際的な問題であった人間形成の問題に目を向ける必要がある。「ものぐいと怠惰とに慣れきっている子どもたちを，絶え間なく続く労働に習熟させることはまったく困難なことであった。……またわたしは両親や身元保証人と書面上の契約をする際の細心の注意，ならびに役所の保護と顧慮がないと，どの工場経営者も子どもたちの正当な滞在さえ保証されないということを，経験によって知った。… これらの地方におけるこうした恩知らずな行為と悪意とがどれだけ工場経営者に不愉快な思いをさせるかは，ほとんど信じられないほどである」。[31] こうした経験が，ペスタロッチーに人間観の深化をもたらしたことは想像に難くない。生産労働の技術を身につけさせることは，なるほど労働人口，すなわち「労働力」を育成することにはなる。しかし労働人口は，資本主義的経済循環に組み込まれることによってはじめて労働力となる。資本主義的経済循環やそのなかでの労働の価値ならびに使命を理解させることのない労働教育は，労働人口としての「労働力」を形成するだけで，けっして真の労働力を形成しない。知的・道徳的教育までも含めた「労働者」の育成によってはじめて，資本主義的経済循環に即応する労働力が確保されるのである。この意味でペスタロッチーは，単にヒューマニストであるだけでなく，また資本主義的経済観においても，すぐれた知識人であったことが理解されるのである。

(2) 労働者教育への「宗教的なもの」の導入

以上述べてきたような，労働者育成の課題は，貧民教育施設の目的のひとつである貧民を貧困に耐えうるまでに教育するという原則のなかにみられる。もちろんこの観点も，ペスタロッチーのいう一般的な人間教育の原則である「個々の境遇（Einzellage）」あるいは「個人的境遇（Individuallage）」から導かれるもので，決して貧民のみに適用されるものではない。[32] たとえば，貴族の子どもは貴族としての境遇に耐えうるまでに教育されねばならない。それと同様に貧民の子どもには，「追い立てられ，強いられ，しかも厳しさを失わない精励の精神，気にしすぎるまでに注意深い倹約な態度，最も困難な最下等な生活にも耐える訓練」[33] が必要なのである。ところで労働者教育というとき，スイスにおける経済構造の変化が念頭におかれねばならない。ペスタロッチーによれば，彼がノイホーフの貧民学校に家内工業を導入したのは，もはや農業だけでは生計をたてることができない状況にあったビル村近郊の経済事情による。ビル村近郊では，貧民たちの生計の支柱として工場産業が開拓されていた。こういう土地では貧民の教育を工場産業の精神に基づいて行うことが絶対に必要であると思われた。[34] 他の場合，例えばチャルナーは，貧民学校の生業として農業を用いていたが，チャルナーが経営していた貧民学校のあったベルンは，農業によって生計をたてることが可能なほど肥沃な地であった。ペスタロッチーはチャルナーに対し，貧民教育が主とする生業が，農業か工業かという相違は，見解の相違ではなく，単に境遇と土地柄の相違である，と述べ，農業を中心とした貧民教育の可能性をみとめており，むしろ自分がおこなっているような工業を主たる生業とした貧民教育を特殊なものとして位置づけている。[35] しかしこの見解からわずか18年後には，ペスタロッチーは，「われわれのほとんど大部分は，完全な商業国家の一員となった」[36] と述べることになる。したがって工業をとり入れたペスタロッチーの見解は，まったく時代

の経済変動に即応したものであったといってよいだろう。

ではそうした経済構造の変動をペスタロッチーはどのようにみているのであろうか。少々長くなるが，ペスタロッチーのことばを引用しよう。ペスタロッチーによれば，「以前のように時代が単純で，農民が，田畑や教会と同様，生まれた土地に縛られていたところでは，いなか町や近隣が挑発してもそんなに効果はなかった。しかし今日においては，商業活動はあらゆるものを結合すると同時にまた相互に分離し，一般的な繁栄はわたしたちの本性のなかの動物的な感情のすべてを刺激している。… 金銭欲と名誉欲とは，良心をいたるところで追い払っている。…富（Reichtum）はわたしたちの生活の土台を破壊してしまった」。[37] では，ペスタロッチーは富をまったく悪として捉えているかといえばそうではない。というよりもむしろペスタロッチーは，富の増大による生活向上の側面を高く評価している。彼によれば，「金持ちの消費（Aufwand）によって，生活の糧と喜びが，――そしてゆたかな祝福が，貧しい同胞の卓上や小屋のなかに流れ込む。全体的にいって，こうした大金持ちが消費する金額は，下層階級にながれていく。この消費がなかったら，民衆の現在の貧苦は，悲惨，困窮，移住ならびに商業の停滞へと移っていくに違いない。――この消費の金額は，その使い方によっては，産業の精神を育成し，洗練する。――全般的に活気づけ，高める。――豊かな市民と祖国との結びつきは，消費によってさらに緊密になる。豊かな商人の利益と祖国の利益との緊密な結びつきのなかに，国家の繁栄の，そして多くの住民の商業的興隆の源泉と保証とがある。金持ちの消費は，祖国の不可避的な要求であると同時に同胞に対する真の恵みであるように思える」。[38] 富の増大は，なるほど貨幣の流通を一般化し，農民の生活を変動させ，多くの無産者を生み出したが，それと同時に農民の生活を向上させ，無産化した貧民に生活手段を提供する。このようにペスタロッチーは富の増大，すなわち奢侈を，具体的・全体的に捉えている。

ところで，奢侈の問題は，ペスタロッチーによってはじめてとりあげられたわけではない。 奢侈論は，18世紀の政論家たちによって好んでとりあげられたテーマであり，節倹や勤勉の徳をすすめる立場から，奢侈の禁止や制限が説かれるのがふつうであった。[39] ペスタロッチーが賞を得たバーゼル市の懸賞論文，「国家の福祉が商業によって基礎づけられている小共和国においては，市民の奢侈（Aufwand）をどの程度に制限するのが適当であるか」も， こうした時代の流れのなかで提出された。ディドロらが編集した『百科全書』には，奢侈が適当な範囲であれば，国家ならびに民衆の幸福の増進に貢献するとの見解がみられる。この見解はディドロたちのブルジョア的立場を端的に示している。奢侈に対する批判の吟味の結果，これまで奢侈が原因だと思われていた事柄は，すべて悪政が原因であり，奢侈それ自体が悪いのではないとの結論に達した彼らは，「奢侈禁止法のうちで不合理でないものは，ただ一種類しかない。… その他のすべての奢侈禁止法はなんらの有用性をもちえない」[40]との見解を導く。「少数者の奢侈を多数者の奢侈にきりかえる」[41]ことが，ディドロたちの意図であった。このうち奢侈禁止法が何ら効果をもちえないという点において，ペスタロッチーとディドロたちの一致がみられる。しかしディドロたちが，少数者の奢侈を多数者の奢侈にきりかえることによって，むしろ奢侈の一般化を奨励するのに対し，ペスタロッチ

ーは奢侈それ自体がもつ有用性を認めると同時にその危険性をも認める。彼は，奢侈によって，民衆の生活に喜びや豊かな祝福が流れ込むのを見ながら，同時にそれをコントロールできないがゆえに，民衆が堕落へ落ち込んでゆくのをみる。奢侈を法律で禁止することは，奢侈のもつ有用性を喪失することになるので，ペスタロッチーは奢侈を民衆自身にコントロールさせることによって，問題の解決をはかろうとする。

ペスタロッチーによれば，民衆をこのような不幸な堕落した浪費から守ってくれるものは奢侈禁止法でもなければ，また贅沢品の禁止でもない。それは正義，義務，家庭の秩序などに対する純粋で確固たる自覚を高める教育のみにかかっている。この教育だけがこれらを可能にし，市民の浪費に合理的な制限を課すことができる。[42] ペスタロッチーは，ここで，消費の制限を生産の増大とみなす観点を示す。ペスタロッチーによれば，一般家庭において必要とされる10ミュットの消費を，倹約によって5ミュットの消費で抑えられれば，それは5ミュットの生産と同じ意味をもつ。[43] このようにペスタロッチーは消費の制限を，消費的行為としてだけでなく生産的行為としてもみている。したがって奢侈の制限は，経済循環の一貫にくみこまれるのである。それゆえ奢侈の制限のために克己力を培うという貧民学校の道徳教育の課題も，資本主義的経済循環のなかに位置づけられるといえよう。

奢侈を制限する教育のために，ペスタロッチーは「宗教的なもの」の有効性を説く。ペスタロッチーにいわせてみれば，放縦きわまる欲望の阻止ということに関する宗教の影響について人はよく知っている。だが啓蒙主義に代表される「宗教は賢明な政策上のことがらにすぎない」というかの原則が，この世はじまっていらい，もっともひどく民衆の無気力なおしゃべりに化した今日の世紀においては，われわれの政治家たちは人類のこの源泉を忘れ果てている。[44] 宗教を統治の手段として利用することに対しては，ペスタロッチーは否定的であるが，宗教がもつ人間形成的な側面についてはむしろ肯定的である。ペスタロッチーの宗教観についていえば，『然りか否か』におけるキリスト教国家に対する批判がキリスト教批判としてみなされ，それは『隠者の夕暮』や『リーンハルトとゲルトルート』におけるキリスト教的国家観からの訣別とみなされてきた。確かにペストロッチーは『然りか否か』において，「世界はキリスト教的には統治されない。統治そのものは，キリスト教的ではない。国家は国家として，そのもっとも本質的な制度において，明確にキリスト教に反して行動する」[45]と述べ，キリスト教的統治を否定している。しかしこのことは，決してキリスト教それ自体に対する批判を意味しない。ペスタロッチーは続けて「国王は祭壇の前にひざまづきながら世界を無法状態にする手段としてイエス・キリストの福音をさしだすが，人々はイエス・キリストの福音をそれほどおとしめはしない」[46]という。つまりキリスト教の名を利用しての統治に対する批判であって，キリスト教それ自体を批判しているのではないのである。というよりむしろ積極的に，個人の手におかれた場合に宗教がもつ人間形成的な作用を認めているといえよう。

法や権利の内面化の重要性を意識し，そのために「宗教的なもの」を利用しようとする見解は，ペスタロッチーの最初の論文である『アギス』にもみられる。ペスタロッチーはアギスの目をとお

して，法律を遵守することによる市民的平等の徹底を国家の基礎におくと同時に，法律の内面化の必要性を説く。アギスは結局，法律の遵守を徹底するがゆえに処刑されるが，それは法律の内面化が不徹底であったからにほかならない。[47] それゆえ国民の啓蒙と法治国家の興隆とは必ずしも一致しない。国民の啓蒙が国民としての意識と結合し，さらに君主が「啓蒙的な，温かい，人間的な原則にしたがって」[48]統治をする場合に，はじめての法治国家を維持する土壌が形成されるのである。ペスタロッチーによれば，「市民的な人間関係が，道徳性（Sittlichkeit）によって基礎づけられ，さらに道徳性と家庭の幸福とを促進するよう作用することは，国家にとって本質的に重要である。なぜなら国家の内面的な強さは，啓蒙（Erleuchtung）に，そして父の家における家庭の幸福にあるからである」。[49] つまり法だけではなくそれを支える人間関係が重視されるのである。彼によれば「父と子のあいだに生じる正義感以上のものがあるであろうか。父と子のあいだでは，啓発でなくて，愛が正義感を一般に形成している。わたしが正義感の基礎を啓発よりはむしろ愛のうえにおかなくてはならないというのは，それが経験上の真理だからである」。[50] ここに近代的法治国家を支える原則として，啓蒙よりも愛に重点をおくペスタロッチーの立場が表明されている。ペスタロッチーによれば，ボルテーユを中心にしたフランス啓蒙主義は，「放漫にも神殿や聖物をあざわらい」，国家の貧しい民衆の善良な心，家庭の幸福，人生のすべての喜び，さらに死の床のすべての希望などの基礎としていた原則を奪い，かわりに軽薄と不安と頑固とを与えた。これは啓蒙が人々を誤らせたからではない。闇より光，迷信よりも啓蒙，貧困よりも富裕を選ぶことは大切なことである。ただ啓蒙は「ゆるがぬ真理感と教化された人間力」とを基礎とせねばならない。このことは，「神とその愛の祝福とに対する真の生き生きとした信仰へと向かうことによってのみ達成されるのである」。[51]

さらに近代的資本主義の進展期である18世紀ヨーロッパにおいては，利己心，虚偽，軽薄，不安，頑固がみちていた。「国家は現代そのものが一般に利己的であるのと同様に，利己的にならざるをえない。国家はこの時代精神にまどわされて，人類をただその集団的な関係（kollektieve Verhältnissen）においてのみながめる。個々人の個人的な関係（Individual verhältnisse）も，それとともに人間本性の真の要求の内的かつ神聖な本質も，こうした状況のもとで，日々見落とされることが多くなる。個々の市民は私的な利己心（Privatselbstsucht）によって自分自身を破滅させ，国家は公的な利己心（öffentliche Selbstsucht）によって自己破滅を迎える」。[52] 私的な利己心が，両親や兄弟姉妹や親戚や隣人や遊び仲間などの間の関係の神聖な絆をなくすると同時に，公的な利己心は，神聖な絆が国内のあらゆる階級を互いに結合することによって，全体の道徳的，精神的，家庭的，市民的な幸福を基礎づける，その絆を本質においてなくしてしまう。[53]

この利己心の対極に，隣人愛がおかれる。ペスタロッチーによれば，「神を信じないものには隣人に対する愛が欠けている。神と隣人とに対する愛が欠けているものには，人間のもっとも大切なことがらに対する関心が欠けている。人間のもっとも大切なことがらに対する関心が欠けているものには，人生の真の智恵の基礎が欠けている」。[54] このように近代的資本主義の進展に伴う富の増

大のなかで，ますます問題化してきている利己心による共同体の崩壊を救う手段として神への愛ならびに隣人に対する愛が重視される。

ところで，当時のスイスにおいては，宗教教育が宗教問答書中心になっていたことからも推察されるとおり，神への愛や信仰心は形骸化していた。ペスタロッチーによれば「神を忘れた理神論者の愚かさ，それは人類の内なることばに呼びかける神に対して，子ごころによる信仰も従順もなしに神の名を呼び，神の真理をもてあそぶものである。こうしたイエズス的な礼拝は，神への信仰としての理神論ではなく，むしろ偽善的な，神を忘れた悪者どものうそであり，心の病，神の忘失状態，無神論とよぶべきものである」。(55) では，ペスタロッチーのいう神への信仰はどのようにして形成されるのであろう。ペスタロッチーは神への信仰は教育の結果ではなくてむしろ土台であるとし，父の手からたべるパロンに，神の愛を直観することが，神への信仰の基礎であるとする。(56) つまりペスタロッチーのいう神への愛とは，まず自分自身への愛であり，自分自身の愛がみたされることによって，神への信仰へと連なるものなのである。こうして神への愛は，地上における愛の実践へともどされる。しかしこのことは，フォイエルバッハ的な転換(57) を意味しない。ペスタロッチーは神に現実の投影をみ，神を天上から地上に引き下ろしたわけではない。彼はむしろ宗教的なものを肯定しながら，地上から天上への道を，道徳教育の法則として示そうとしたのである。それゆえペスタロッチーの道徳教育観には，宗教的なものとの決定的な断絶が含まれているかのようにみえるが，それは現実の社会状態を強く反映しているためであり，彼はむしろ宗教的なものとの連続性を明らかにするよう試みているのである。

このためにペスタロッチーは家族愛を重視する。ペスタロッチーによれば，「満足している乳飲み子は，この道において，母親が自分にとって何であるかを知っている。しかも母親は，乳児が義務とか感謝とかいうことばを口にできないうちに，感謝の本質たる愛を乳飲み子のうちに形づくる。そして父親の与えるパンを食べ，父親とともにいろりばたで身を暖める息子は，この自然の道において子どもとしての義務のうちに自分の生涯の幸福をみつける」。(58) 家族愛はまた市民道徳の源泉でもある。彼によれば，「すべての正義が愛にもとづいているように，自由も愛にもとづいている。純粋な子ごころは正義にもとづく自由の真の源泉であり，そして純粋な親ごころは正義を実行し自由を愛するだけの気高さのあるいっさいの政治力の源泉である」。(59) つまりペスタロッチーは，第一に家族愛が市民的義務の源泉であること，第二にこうした家族愛の形成過程を自然法則（自己保存の貫徹）として捉える見解を示す。第一点についていえば，家族愛と市民的義務との連続性を示すペスタロッチーの見解は，ルソーの継承でもある。しかしルソーと異なるのは，ルソーが自己愛の変容による市民の育成を志向したのに対し，ペスタロッチーが自己愛の貫徹をその基礎においている点である。(60) ペスタロッチーはもともと「ルソーが分離したものを結合しなければならない」(61) との問題意識にたっており，個人と社会との矛盾の止揚というこの問題意識はペスタロッチーにおいては弁証法的人間観に結実した。(62) すなわちペスタロッチーにおいては，人間は現存在として，自己保存の要求をもつと同時に同胞愛への要求をもった存在なのである。こうした人間本性を発達

させることによって，近代市民社会を構成する近代人が形成される。しかもそのために決定的な敏感期は，乳児期における母親との触れ合いのなかにある。こうしてペスタロッチーは，家族の結合のなかに一般的な人間結合の源泉をみる。

以上のようにペスタロッチーは，教会勢力の行った宗教教育とは異なる宗教的なものの教育を近代的な人間結合の論理として提出するとともに，その源泉を家族愛におく。個々の家族のなかで育まれる人間結合としての愛の論理は，啓蒙主義的見解からみれば，なるほど非合理的なものである。しかしまた同時に，感覚や直感から形成される愛は，教会的なドグマを否定する意味では合理的でもありえたのである。

ところでペスタロッチーの時代は，近代化のもつ社会変動のなかにあって，家族が個別化し，近代的家族が形成されていく時代であった。(63) バダンテールの指摘にあるように，近代的家族の形成期にあっては，家族愛というのは一般的ではない。(64) 家族愛は，封建社会の残物ではなく，近代に形成された概念なのである。したがってペスタロッチーにおける家族愛の論理は，古い家父長制イデオロギーの再興ではない。そうではなくしてむしろ近代家族の特殊機能の抽出なのである。母親を中心に，家族愛によって結合された近代的個別家族は，その後，政治的な意味でも経済的な意味でもコアとしての役割をもつことになる。家族愛の概念は，今日なおその有効性を失っていないが，家族愛の機能はすでに変容し，むしろ家族愛がもともともっていた求心力に反作用をおよぼしつつある。近代的個別家族そのものが崩壊しつつある今日，わたしたちは，家族愛にかわるあらたな個人の社会的結合の論理を求めていかねばならないときにきているといえるであろう。

「注」

(1) Paul Kläui ; Freiheitsbrief. Bundesbriefe Verkommisse und Verfassungen, 1231-1815, Aarau, 1963, S. 49. 遠藤盛夫著『スイス国民学校制度史研究』風間書房，1987年，25～28ページ。

(2) Pestalozzi : Sämtliche Briefe, herausgegeben vom Pestalozzianum und der Zentral Bibliothek in Zürich, Orell Füssli, 1946-1971, (P.S.B.と略す), Bd. 3, S. 45.

(3) クループスカヤ著，勝田昌二訳『国民教育と民主主義』岩波書店，1954年，50～53ページ。

(4) ノイホーフの貧民学校における実践をとりあげているのは，H. Morf ; Zur Biographie Pestalozzis, Winterthur, 1868ff. H. Schönebaum ; J. H. Pestalozzi, 1954. K. Silber ; Pestalozzi, Heidelberg, 1957. M. Liedtke : J. H. Pestalozzi, Germany, 1968. などの伝記的研究であるがこれらはペスタロッチーの生涯の一部分としてノイホーフの貧民学校をとりあげているにすぎない。

(5) A. Rang ; Der politische Pestalozzi, Frankfurt a. M., 1967, S. 28

(6) バーゼドー著，金子茂訳『国家と学校』明治図書，1969年，189～191ページの解説参照。

(7) E. Troeltsch: Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionsoziologie, Gesammelte Schriften, herausgegeben von H. Baron, 1925, S. 339.（内田訳『ルネサンスと宗教改革』岩波書店 1959年，92ページ。）

(8) Pestalozzi; Sämtliche Werk, herausgegeben von Buchenau, Stettbacer, Spranger, Berlin und Leipzig, 1927ff.（P.S.W. と略す）Bd. 9. S. 166−167

(9) E. Spranger; Pestalozzis Denkformen, Stuttgart, 1947, S. 46.（吉本訳『ペスタロッチーの思考形式』明治図書，1962年，42ページ。）『ペスタロッチー全集　第6巻』平凡社，1959年，318−319ページ，解題。森川直「ペスタロッチーにおける前期教育思想の形成」(日本教育学会『教育学研究』第43巻第3号，1976年)，3ページ。

(10) P.S.W., Bd. 10, S. 105.

(11) H. Morf; a.a. O., S. 98. ドゥ・ガン著　新堀通也訳『ペスタロッチ伝』学芸図書，1955年，19〜25ページ。

(12) P.S.B., Bd. 3, S. 29. M. Liedtke; a.a. O., S. 35−36.

(13) Ebenda, S. 4−6.

(14) 農場経営の挫折はひとつの契機にすぎない。農民の子どもへの職業教育は農場経営を始めたころからのペスタロッチーの意図であった。（K. Silber; a.a. O., S. 29−30.）

(15) P.S.W., Bd. 1, S. 142.

(16) Geschichte der Schweiz und Schweizer, Basel, 1986, S. 572. ロレンツ・ストウッキ著，吉田訳『スイスの知恵』サイマル出版会，1974年，48ページ。

(17) C. Ulrich: Handbuch der Schweizer Geschichte, Bd. 2. Zurich, 1980, S. 748.
また柳久雄著『生活と労働の教育思想史』お茶の水書房，1962年，89−90ページ，参照

(18) Morf; a.a. O., S. 133.

(19) P.S.W., Bd. 1, S. 144.

(20) Ebenda, S. 138, 148.

(21) Ebenda, S. 143.

(22) P.S.W., Bd 8, S. 236.

(23) クループスカヤ著，前掲書，52ページ。

(24) E. Badinter; L'amour en plus, Paris, 1980, S. 141−153.（鈴木訳『プラス・ラブ』サンリオ，1981年，158−172ページ。）

(25) 柳久雄著，前掲書，87−88ページ。

(26) P.S.W;, Bd, 1, S. 155−156.

(27) Vgl. Ebenda, S. 149−156.

(28) Ebenda, S. 157.

(29) Morf; a.a. O., S. 133.

(30) P. S. W., Bd. 8, S. 278.

(31) P. S. W., Bd. 1, S. 166.

(32) H. Schönebaum; a. a. 0., S. 20.

(33) P. S. W., Bd. 1, S. 145.

(34) Ebenda, S. 158.

(35) Ebenda.

(36) P. S. W., Bd. 10, S. 298.

(37) Ebenda, S. 300－301.

(38) P. S. W., Bd. 1, S. 313.

(39) 『百科全書』岩波書店，1971年，408ページ，解説。

(40) 同前書，285ページ。

(41) 同前書，409ページ，解説。

(42) P. S. W., Bd. 1, S. 316.

(43) Ebenda, S. 173.

(44) Ebenda, S. 319.

(45) P. S. W., Bd. 10, S. 127.

(46) Ebenda, S. 128.

(47) P. S. W., Bd. 1, S. 8－10.

(48) P. S. W., Bd. 1, S. 257.

(49) Ebenda, S. 249.

(50) P. S. B., Bd. 3, S. 77－78.

(51) P. S. W., Bd. 9, S. 166.

(52) Ebenda, S. 525.

(53) Ebenda.

(54) Ebenda, S. 167.

(55) P. S. W., Bd. 1, S. 258.

(56) Ebenda, S. 259.

(57) エンゲルス著　松村一人訳『フォイエルバッハ論』岩波書店，1960年，88ページ。

(58) P. S. W., Bd. 1, S. 266.

(59) Ebenda, S. 281.

(60) E. J. Hobsbawm; The Age of Revolution, London, 1962, P. 247－248.（安川他訳『市民革命と産業革命』岩波書店，1968年，401－402ページ。）なお，「ルソーは，常に私的欲求と公共の観念にひき裂かれた二重の存在であるブルジョアに対して，私的欲求を否定し，全体に対して自己を同化することで自己の統一性を確立する市民という概念を対置させている」との見解もあ

るが，ここではペスタロッチーの時代意識という点から，個と社会との分裂という点をとりあげた。（森田伸子著『子どもの時代』新曜社，1986年，139ページ。）

(61) P.S.W., Bd. 1, S. 127. H. Gudjons; Gesellschaft und Erziehung in Pestalozzis Roman "Lienhard und Gertrud", 1971, Weinheim, S. 85.

(62) A. Rang; Das Erbe des politischen Pestalozzis, (in: Pestalozzis Erbe herausgegeben von J. Gruntz-Stoll, Germany, 1987) S. 42-43.

(63) Schweizer Lexikon, Zürich, 1945-1948,Bd. Ⅲ, S. 209. 小林登他編『新しい子ども学　第3巻』海鳴社，1986年，148ページ。

(64) E. Badinter, a. a. 0., S. 39.